

令和 5 年北海道胆振東部地震の研修レポート

「(一社)栃木県地質調査業協会」

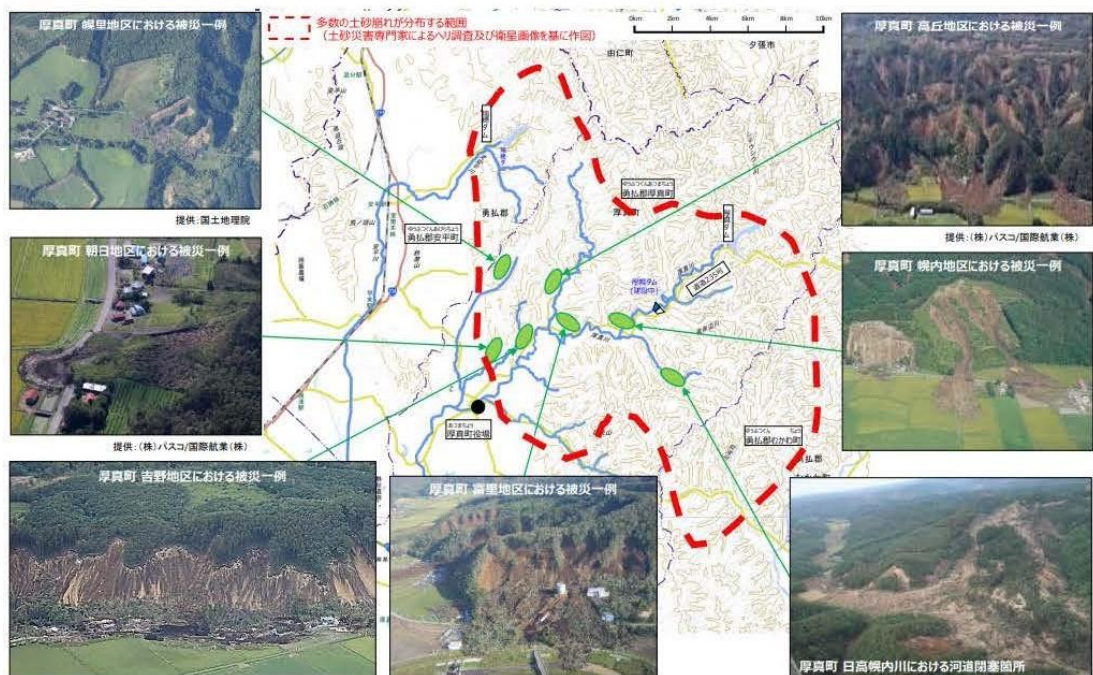
去る 9 月 14.15.16 日、(一社)栃木県地質調査業協会の創立 50 周年記念事業の一環として、北海道胆振東部地震の被災現場を視察研修することとなった。

この地震は、平成 30 年 9 月、北海道胆振中東部においてマグニチュード 6.7、厚真町（あずま）で震度 7 を観測する大地震が発生し、尊い多くの人命が亡くなり、大規模な斜面崩壊が随所に発生したことでよく知られている。

今回の記念研修旅行は、その災害地において、被災状況の視察と地震のメカニズムについて現地の見解の説明を受け、東日本大震災を経験する我々協会員も今後を見据えた地震とその対策について学習することを目的とした。

【被害状況】

住家被害については、震源地周辺や人口が多い札幌市を中心に全壊が 462 棟（厚真町 222 棟、札幌市 95 棟、安平町 93 棟等）、半壊 1,570 棟（札幌市 684 棟、安平町 351 棟、厚真町 308 棟等）、一部破損が 12,600 棟（札幌市 4,352 棟、むかわ町 3,147 棟、安平町 2,412 棟、厚真町 1,045 棟等）であった。



参考資料：国土交通省「平成 30 年北海道胆振東部地震への対応状況」より

研修は、茨城空港に午前7時に集合、関東ツアーサービスの案内により一路北海道千歳空港に出発、午前10時には千歳に到着し、現地バスにて途中で昼食をとり、その後、厚真町の災害現場案内人を同乗し、厚幌ダム周辺に広がる災害現場へと出発した。

厚幌ダムに向かう途中、火山灰粘性土層により形成された台地及び丘陵列が車窓の西側を中心に広がりその斜面は、地震による斜面崩壊の爪痕が随所に広がり、今も当時のままとなる茶褐色の山肌が地震のエネルギーの大きさと激しさが身近に感じられ、参加者の驚きと溜息が車内に広がった。

見学した斜面崩壊は、概略で比高20mから50m、幅100mから500mの箇所が多く見られ、案内人のお話だと崩壊幅が約2kmにも及ぶ箇所があるとのこと。この状況は、戻りの車窓から確認され一同、驚きを隠せない様子でした。

崩壊現場は、人家や水田等の周辺を中心に、復旧工事が進みそこには桜の木が植樹され細長い苗木が多く見られ、いたるところで現在も多くの工事関係者の手により復旧作業が進められていました。

研修により、崩壊現場の状況は、地震の影響を受けやすい軟弱なローム層で形成された斜面が中心として崩壊したことが分かった。

2011年の東日本大震災の身近な斜面崩壊と比較すると、今回の研修同様に特殊土扱いされるローム層を中心に被害が多く見られ、地震動の影響を受けやすいことがわかる。今後、委託業務を実施するケースも多いと考えられるが、今回の研修を教訓に会員のスキルアップに繋がればと考えました。

尚、以上の事由に関連し、東日本大震災の時に感じたのが、主に東斜面から北斜面が多く崩壊しているため、地震の震源地とその方向性、地盤の東方向への移動が関わっているのかなと思い、胆振地震においてその点を注意深く見てきましたが、斜面崩壊は、四方八方に見られことによりこの地震の規模の大きさを改めて考えさせられました。

最後になりましたが今回、多くの災害の爪痕を見学し、地震により多くの方が亡くなり、または被災された皆様方に改めてお悔やみとお見舞いを申し上げますと同時に、被災現場の復旧と被災された皆様方におかれましては、震災以前の生活に一日でも早く戻れます事をご祈念申し上げます。

尚、我々協会員一同、地質調査業務に携わる者として、少しでも災害リスクを減らす努力と研鑽に励むことを、今回の研修を機に心に誓いあいました。

研修は、災害現場を後にして、札幌市近郊の羊ヶ丘展望台に行き、札幌ドームを中心とした、眼下に広がる札幌市を望む石狩平野は広大で北海道らしい風景が見られ、そこには北海道の開拓の父と呼ばれるウイリアム・スミス・クラーク博士の偉功を見学し、北海道の開拓の歴史や苦労を垣間見てきました。

以上で、研修のあらましと感想を述べましたが、会員各位からは、又このような研修をとの意見を多く聞き、今後とも協会及び会員各位の発展と社会貢献に努力することを全員で確認いたしました。

尚、最後に今回の企画関係者及び現地関係者のご協力に心より謝意を表します。



記念写真：厚幌ダムにて、ダムのお陰で下流の土砂災害が軽減されたとのこと